
ポケットモンスター Dream story

アストン・ヴォルテクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター Dream story

【Nコード】

N2632Y

【作者名】

アストン・ヴォルテクス

【あらすじ】

ポケモンを捕まえに行こうとしていた、アストン・ヴォルテクス。そんな彼は、前日夢を見ていた。それは、ポケモンになり、綺麗なお姉さんのポケモンになるという夢だった。そして、その夢と似たような出来事が起こったのだった！なんと、自分がポケモンになり、綺麗なお姉さんではなく、かわいい女の子のポケモンになったのだった。これは、ポケモンになってしまったアストンとこの物語のヒロインのアストンの主人とその仲間達がポケモンリーグに挑戦するまでの物語である。

※作者の方は、必ず評価を

してくださいね！ 正直にやってください！ これで、どこを直せばいいのか、多分少しは分かりますし。そして、出来れば作者の方も読者の方も感想でも指摘とかしてください！ どこを直せばいいか詳しく分かりますから。ご協力お願いします！ では、コミカルでシリアスな「ポケットモンスター Dream story」へ、Let's GO!!!!!!

主人との出会い（前書き）

相談に乗ってくれた方々、本当にありがとうございました！！！！！！！！！！

では、お待たせしました。

どうぞ……！！！！

主人との出会い

「ポケットモンスター」、縮めて「ポケモン」。これは、この世界にすむ、不思議な生き物である。そして、ここ、「オリジン地方」にある小さな町、「ムセシタウン」に一人の少年がいた。この少年の名は・・・

——アストン・ヴォルテクス。

身長151センチでゼビア色の髪の毛（レブリアのほうは黄色）が特徴で、やけに長く、（一番長いので85センチ）前髪が少々はねている。そして、赤をベースとした、帽子をかぶり、黄緑をベースとしたパーカー、そして、黒をベースとしたポケットがたくさんついているズボンをはいていた。このズボンは半ズボンにすることも可能で、パーカーにはお腹の辺りに大きなポケットが着いている。そして帽子は、この世界でポケモンを捕まえるのに必要な「モンスターボール」の絵が描いてある。

そして、彼は、家を出てポケモンを取りに行こうとした。したのだが。なんと、不思議な不思議な出来事が起こってしまった。それは・・・

——自分自身がポケモンになってしまったのだった！！！！
何故そうなったか。それには、ある原因があった。いやないと困る。マジで。理由は、1億2000年前にさかのぼる。

?? 「生まれてねえよ！！！！」

失礼しました。1時間20分前にさかのぼる。

?? 「どんだけ間違えてたんだよ!!!」

アストンは、それまで、夢を見ていました。とてもとても不思議な出来事です。それは、自分がポケモンになって、それはそれはとても美しく、輝いていて優しくて、面倒見がよくてポケモンがとっても大好きな綺麗な綺麗なお姉さんトレーナーにつかまるという夢でした。一方、そのころ、アストンが寝ていると、アストンの周りを包むかのように、光が現れ、アストンの右手に変な紋章がつけました。この紋章こそがこうなってしまった原因です。

ちなみに、この紋章の効果は、この紋章を宿したものを、外に出た瞬間にポケモンにしてしまい、トレーナーに捕まえられ、トレーナーと一緒にポケモンリーグに挑戦し、見事全勝するまでは、絶対に元に戻らないという効果です。さあ大変!アストンはどんなトレーナーに捕まり、どんな出会いがあり、どんな冒険になるのか、ドキドキワクワクなスパーウルトラチョロチョロホイホイミラクルハイパー面白い冒険物語の始まりです!!!

あ、そうだ、サービスとして、ちょっとだけ話を進めてあげよう!

?? 「何がサービスだよ!」

お? ちょうどいいところに。皆様、この??こそが、この物語の主人公、アストン・ヴォルテクス君です! ささ、自己紹介自己紹介!!!

アストン「お、おう。やあ、俺はアストン・ヴォルテクスだ。綺麗なお姉さんが大・・・」

はい、ありがとうございます。では今から物語スタート！

アストン「ってちょっと待て！！？俺の自己紹介はまだ終わって・
って今から物語かよ！！もう始まってたんじゃないの！？さっきま
でのは何だったの！！！！！！？」

・
・
・
・
・

アストン「あれ？おっかしいな。なんか人とか家とか、いつもよ
りでかく感じるぞ？それに・・なんだこの状況・・大勢の人が
俺を囲んでるーっ！！！！！！？」

アストン・ヴォルテクスは急展開にとっても驚いていた。

アストン「いや、フルネームじゃなくていいから（汗）それにし
ても、どうして？何で？綺麗なお姉さん達は？」

アストンはそういうながら（周りにいる人たちには鳴き声にしか
聞こえない）指を口にくわえていた。すると、なんといきなり大勢
のかわいい子&綺麗なお姉さん達だけの女性陣が集まってきて、目
をハートにしていた。

アストン「お？お？なんか結構いい感じ・・・でへへ（笑）」

アストンはそういうながら（周りにいる人たちには鳴き声にしか
聞こえない）少々だれをたらししてしまった。だが、しばらくする
と、さっきまでいた大勢の人たちは全く別の方角へいつてしまった。

アストンはあれ？という気持ちと、悲しい気持ちの両方の気持ち
を持ちながら人盛りの多いところへ足を運んだ。運んだのだが。途
中にあった水溜り（前日は大雨だった）が目に入ると、今まで以上

に驚いていた。

アストン「俺が・・・俺が・・・ヨーギラスになっちよるーっ
!!!!!!!!!!」

アストンはそういいながら（周りにいる人たちには鳴き声にしか聞こえない）体を後ろに引き（両手を後ろにやり、いかにも驚いているようなポーズ）驚いていた。

ちなみに、ヨーギラスとは、最初に言ったポケモンのことで、全身がほぼ黄緑色で出来ていて、お腹の辺りが赤、その周りに◆のマークが2つあり、頭にあるちょんまげ（とさか）がチャームポイント（多分）のポケモンだ。ちなみに、このポケモンの種類はいわはだポケモンで、タイプ（ポケモン全匹が持っているもの）はいわとじめんだ。

アストンは何がなんだか分からなくて、パニックになっていた。すると、いきなり右手が痛くなった。激痛だ。すると、後ろから女性性の声が聞こえた。

??「チコ、つるのムチ!」

チコ(?)「チコ!」

アストン「なに!?!うわーっ!?!」

??「そのまま地面に叩きつけて!」

チコ(?)「チッコォ!」

アストン「ひでぶっ!」

?? 「よし！ いっけー！！ モンスターボール！！」

女性の声が、そういうとモンスターボールをアストンに投げつけた。アストンの頭にそれが当たると、アストンはその中に入った。

「モンスターボールの中」

アストン 「何だろう・・・ここ・・・光が温かくて・・・いい気分になる・・・。ポケモンたちは皆、こんないいところに入れるんだな」

アストンはそういいながら自分のことを考えた。

アストン 「どうしてヨーギラスになっているんだろう？」

アストンがそんなことを考えていると、いきなり体が激しく動き、温かい光の中をあっちにいたりこっちにいたり、ウロウロしていた。すると、いきなり光の中に何かの空間が現れ、アストンを吸い込み、そしてアストンがその中に入ると同時に空間も消えてしまった。

「ムセシタウン」

?? 「ヨーギラス！ 出ておいで！」

女性の声がそういうと、アストンはいつの間にかムセシタウンにいた。

アストン 「あれ？ ここどこ？」

?? 「あ・・・あ・・・しゃ・・・しゃべった!!? 君、人間の言葉がしゃべれるの!!!?!? 」

アストン 「え!?!? え、なにこの展開! RPGでいうまさかの運命の出会い!!?!? っていうやつ!!! 」

?? 「ふふ、君って面白いね! ヨーギラスなのに。私はナツカっていうんだ。こっちは私のパートナーのチコリータでチコっていうの! 」

チコ 「チコ! 」

チコリータというのもポケモンで、はっぱポケモン、タイプはくさだ。※ちなみに、自分はポケモンの鳴き声はあまり分からないので、俺のイメージでやっています。ちがっていても、文句は受け付けません!

アストン 「お、おう! お、おれは・・・ア、アストン・・・ヴォ・・・ヴォルテクスだ!!! 」

アストンは照れながら、何とか自己紹介が出来た。

ナツカ 「へえ、名前があるんだね、ストーン・ボルテクスか」

アストン 「それだと石になっちゃまうじゃねえか! そんな名前じゃない! アストン・ヴォルテクス!!! 」

ナツカ 「いい名前だね。よし! 決めた! あなたのニックネームはボウちゃんね! 」

アストン「俺はアストンだーーーーっ!!!!!!!!!!それに”ボ”じゃなくて”ヴォ”だし!!間違えるなし!!」

ナツカ「私はあなたの主人だから、言うことは聞きなさい!!って、ちゃんと目を見て!?!どこ向いてるの!」

アストン「よそ見してねえし!!」

いや、アストンは余所見をしていた。そして、ナツカは余所見をしているアストンに注意をした。でもアストンはちゃんと前を向いていた。だが、それは悪魔で人から見れば。そう、アストンはヨーギラスでちっちゃくなつたため、上を見するという習慣がなかったのだ。

もともと、アストンはニートだったため、自分より背の高い人を見るのは初めてだった。ちなみに、最初に家に出たときも実はいうと、足の数で大勢といったのだ。実はいうと、その周りにいたのは5人で、アストンは足を見て、一本の足＝一人の人間、と認識してしまったのだった。

アストンはナツカにいわれると、ゆっくりと上を向いた。すると、だんだんと顔が赤くなり、ついには上を向いたまま鼻血が出てしまった。なぜなら・・・

———か、かわいい・・・／／／

アストンは彼女の顔を見た瞬間にそう思った。そう、ナツカはめっちゃかわいい女の子だったのだ。きつと、この顔だったら、もうセクハラもされているだろうというほど可愛かった。

ちなみに、容姿は青い髪が肩辺りまであり、目は少々大きく胸も

結構大きくお腹はスツとなっていて、足が細くとても美しい足だった。そして、髪の毛には髪留めもつけている。

アストンは思った。

——こんなかわいい子が俺の主人だなんて・・・なんて俺は幸せなんだ・・・!!、と。

ナツカ「ふふ！かわいい！ボウちゃん。よしよし。ほら見てチコ、新しい仲間よ」

チコ「チッコ！」

ナツカはそういいながらアス・・・ボウを抱っこし・・・

ボウ「いやアストンでいいんだぞ！？つーか変えるの遅いぞ！！？ってかいつの間にかボウになってるし！！！」

全身が緑色で頭に大きな葉っぱをつけているポケモン、チコリータのチコにボウを近づけた。チコもとても喜んでいるらしく、その場でピョンピョン飛び跳ねていた。

ボウ（な、なんだこいつ（チコ）・・・かわいいじゃねえかコノヤロー・・・／／／）

ボウはチコにも一目ぼれした。ちなみに、チコは♀（メス）である。

ナツカ「ボウちゃんはこれから私とこのチコと、これから仲間になるポケモンたちと一緒に、ポケモンリーグに行くんだよ？いい？」

ナツカは、抱っこしているボウにそう言い聞かせた。だが、ボウ

はナツカに抱っこされて変態モードを発動しているため、全然聞こえていなかった。

ナツカもそれに気づかず、ルンルン気分のままモンスターボールに入れた。入れたのだが。突然モンスターボールからアス・・・ボウが出てきた。

ボウ「だからアストンでいいんだって！いちいち言い換えるな！っていうか早く名前をアストンに・・・」

はいはい、今は小説ないだからちゃんと言うこと聞いて。じゃないと目玉をほじくるぞ？

ボウ「モンスターボールの中、なんか変な感じがするんだよね。だから、モンスターボールに入れないで？（冷汗）」

（キラリッ）ボウはそういいながらナツカに抱きついた（足に）

ナツカ「えゝ？でもゝチコもモンスターボールいやだって言うんだよねゝ・・・どうしよう・・・」

ボウ「そこを何とか！！」

ナツカ「・・・分かった。じゃあ、二人とも外に出ていいよ！でも、ボウちゃんは自力で歩いてね。チコはいつでも私に乗っていいよ」

ボウ「え？なんで俺はダメなの？」

ナツカ「だって・・・重いもん。72kgを抱っこできた私ってすごいと思わない？」

うん、すごいよ。とっても。もうまさにかい・・・なんでもないです。

こうして、この物語のヒロイン、ナツカと主人公ボウとその仲間達の冒険は始まったのであった。

主人との出会い（後書き）

あと、更新はカメレオンです。（||超遅い）

ですが、どうかお読みいただければと思います！

よろしくお願いします！！！！

評価を必ず作者の人はやってね！！！！！！

ポケモンバトル！（前書き）

はい。ポケモンバトルです。

??? 「よーヨーグラス」

お前はまだ出るな〜！！！！ドアホが！！

ポケモンバトル！

ボウ「そういえばさ。ナツカって何歳なの？」

ナツカ「8歳」

ボウ「へえ……ってうそおおおおお！！！！！！」

ボウは旅に出てすぐから驚きの声を上げた。

ボウ「は……は……8!!!!?嘘つくなよ!!!!」

ナツカ「本当より！！本当に8歳よ！じゃあ聞くけど、ボウちゃんは何歳なの！？」

ボウ「お、俺！？俺は・・・その・・・えっと・・・あ、あれだ・・・（やべえ・・・歳忘れた・・・）」

ボウは、とんでもないことになってしまっていた。なんと、自分の歳を忘れてしまったのだった。これはとんでもない大失態！ボウはどうするのか！！？とそのときだった。

ナツカの頭に何かが当たった。音はというと……

ヒューーーーーン・・・ドカーーーーー

という音だった。これにあたったナツカはなぜか小さいたんこぶ
 だけですんでいた。今のは絶対にB○○が爆弾を落としたような音

だ。なのにたんこぶだけって・・・どゆこと!!? あ、失礼失礼。ついつい突っ込んでしもうた。

ナツカが、あたったところをなでながら後ろを向くと、そこには一匹のポケモンと見える物体と一人の少年が立っていた。

??? 「やーいやーい!! バカツバカツ! それにそんなバカツの相棒のチカンも一緒か!! あはははは!! おや? もう一匹増えているようだね。まあ、どちらにせよ、弱いポケモンだろ!」

??? 「ダン! ダン!!!!」

??? 「おお! そうかそうか!!」 ダンバル” もそう思うか。あはははははは!!!!」

その少年は漆黒の黒髪に黒い帽子をかぶり、黒と黄緑をベースとしたジャケット、黒と水色をベースとしたポケットがたくさんついているズボン、そして、黒い革で出来た手袋をしていた。その隣には、青くて、鉄のようなもので出来ているポケモンでつきゅうポケモンのダンバルがいた。

ナツカ「あなたは・・・レツハ!」

レツハ「よっ! バカツ。それと、チカンちゃん?」

レツハという少年はからかいながらナツカとチコの名前をわざと間違えて呼んでいた。

ナツカ「私はナツカ!! こっちはチコよ! もう間違えないでよ!!」

レツハ「はん! テメエなんか、一生バカツでいいんだよ! バカツ!

！」

ナツカ「何ですって〜？もういっか・・・」

ナツカが言葉を言おうとすると、いきなりチコがレッツハに向かつてつるのムチを仕掛けた。だが、それをダンバルが「とっしん」という技で跳ね返した。

チコは思い切りつるのムチを放ったのか、つるのムチはそう簡単にはとまらなかった。そして、あと少しチコにあたり、チコにダメージが来るといふときだった。なんと、ボウがそのムチを喰らって、チコを守ったのだった。

ボウ「ステキなレディをいじめるなど・・・男として恥ずかしくないのか！！！」

ボウはレッツハにそういった。そういったのだが。レッツハには泣き声にしか聞こえない。だが、それをダンバルが勘違いし、自分に言っているのかというかのように、いきなりボウに突進を仕掛けた。すると、ボウの後ろからまたもやチコがつるのムチを放ち、今度はつるのムチをはじき、ダンバルをかく乱させた。

ボウが後ろを見ると、チコが笑顔を見せながらボウを見ていた。

ボウ（か、かわいいなコノヤロー！！！！）

ボウはまたもやそう思っていた。そして、また前を向き始めると、前を向いたまま、ナツカにいった。

ボウ「ナツカ！あのレッツハっていう人にポケモンバトルを申し込め！なんかつと頭にきたからさ！あいつ！」

ナツカ「で、でも・・・」

ナツカは戸惑っていた。何故だかしらないが。

ナツカ「どうせ、私なんか負けちゃうよ。だって、昔からレツハに
いじめられていて、いつも負けちゃうもん。3歳の時からチョコと
一緒だけど、チョコはまだ幼いし・・・と言っても、このチョコは3代
目のチョコなんだけど・・・」

ボウ「え？」

ナツカ「実は、このチョコは3匹目のチコリータなの。一匹目は、レ
ツハとレツハのダンバルにいじめられて死んじゃって、二匹目も、
一匹目と同じでいじめられてこの子を産んだら死んじゃって・・・
もし、また負けちゃったら今度はこの子が・・・！」

ナツカはそういいながらだんだんと涙があふれ出してきた。する
と、ボウがまだ前を見ながらナツカに言った。

ボウ「大丈夫さ」

ナツカ「え？」

ボウ「大丈夫だっていつてるの！チョコは俺が守る！俺がいるさ！ど
うせあいつはあのダンバル一体だろ？今度は今日は俺をバトルに出
してくれ！絶対にチョコを傷つけさせないし、死なせたりもしない。
俺があいつらをぶった切って、チョコを守って、無事にナツカたちと
一緒にポケモンリーグに行く！俺は、ボケでザコで泣き虫で弱虫だ
けど、男だ！男は、大事な人を守んなきゃいけないんだ！約束も守
らなきゃ。俺は死んでもいい。でも、死ぬ前にお前達を守る。」

ボウはここまで言うのと、ゆっくりとナツカの顔を見ながら、こう言った。

ボウ「約束だ！そして、俺は宣言する！絶対に、仲間を・・・大切なものを守ってみせる！！！」

ボウがそういうと、ナツカは涙を拭きながらうなずいた。そして、レツハを見るとこう言った。

ナツカ「レツハ！私はあなたに、ポケモンバトルを申し込む！！！受けてたちなさい！！！」

レツハ「はん！テメエなんか、また泣かしてやるよ！今日は、そのチカンちゃんと、ザコポケモンもぶっ殺してやる！！！行くぞダンバル！！！！今日は特別に1対2で勝負してやる。お前はそのチカンちゃんとザコポケモンを出していいぞ？あはははははは！！！」

ナツカ「いいわ。ただし、もし私が勝ったら・・・私の言うことを聞いてね！！！」

レツハ「寝言はおねんねしてるときに言ってるや！！！ダンバル、とっしん！！！」

ダンバル「ダーン！」

ナツカ「ボウちゃん！もうここはあなたの自由よ！！！」

ナツカは、そう指示すると、チコを抱き上げた。そして、それと同時に、待ってました！！！！いいながらボウがフィールドへ出た。

ボウ「へん！そんなとっしんしか能のないポケモンなど、ひねり潰してやるわ！！！喰らえ！」かみつく！！！」

ダンバル「ダン！？」

ボウはとっしんしてくるダンバルを口を大きくして待っていた。すると、それに勢いよく突っ込んできたダンバル。それをタイミングよく牙でかみついた。ダンバルはとっても硬かったが、負けず嫌いのボウ。全パワーを使って何とかダンバルにダメージを与えることは出来た。だが、ダンバルのとっしんの勢いが大きかったせいか、吹っ飛びながらでの攻撃だった。

ボウ「よつと！！。りゅうのまい！！！」

ボウはダンバルから距離を離すと、そこでりゅうのまいを踊った。それを計3回繰り返すと、ダンバルが要約とっしんしてきた。なぜか、もうダンバルは息が切れていた。多分、今までダメージを受けたことがなく、防ぎ方がよく分からずに大ダメージを負ってしまったのだろう。

ボウ「来たな！いわなだれ！そしてかみつく！！！」

ボウはダンバルがとっしんしてくるのを待っていたかのように飛び上がり、いわなだれをおこして、ダンバルの道をふさぎ更にかみつくを行った。このいわなだれの効果は、ダメージを与えるためではなく、相手の勢いを最小限まで抑え、更にその勢いで岩にぶつかって防御を壊し、無防備の状態のダンバルに攻撃を仕掛けるという作戦だ。

ボウの作戦は見事決まった。ダンバルはボウの思うように動いて

いたのだった。

まず、岩にぶつかり勢いを落とし次に防御を壊し、なおかつダメージも受けていた。このダメージは岩にぶつかった痛さと、突進の勢いが強くて反動を受けたダメージだ。そして、岩をつつきると待っていたボウの口に入ると同時に、ボウがかみつき、ダメージを与えた。

ボウ「これで最後だ！！いやなおと攻撃！」

ボウは止めとしていやなおとを行った。本来、この効果は相手の防御を下げる効果だが、今のダンバルからの状態からすると、もうダメージといってもいいだろう。ダンバルは、このいやなおとを聞いて戦闘不能となった。

そう。ボウは、見事ポケモンバトルに勝利したのだった！

ポケモンバトル! (後書き)

うーい! 次回は、さあ、待ちに待ったレッツハとレッツハのダンバルを
ボコボコに・・・

レッツハ「やめろおおおおおおお!!!!!!」

ダンバル「ダンバーーーーーール!!!!!!」

フハハハハハハハ!! 無様な!! さて、次回はなんとあそこへ!!

ナツカの願いと・・・（前書き）

今回はナツカの願いと、あそこへ行きます！

ではどうぞ！

（レッハが嫌いなあなた！もしかしたら今回でナツカも嫌いになっ
てしまうかもしれないですよ。多分）

※残酷な要素が前半にありますので注意を！

ナツカの願いと・・・

ナツカ「それじゃあ・・・私のお願い聞いてくれる？」

レツハ「な、なんだよ・・・」

ナツカ「あの・・・友達になって！」

レツハ「はあ!？」

ナツカのいきなりの言葉に、レツハは戸惑っていた。

ナツカ「チコを二匹も殺したのは許せない。多分、一生。でも、私に一番最初に話しかけてくれたのは、あなただった。そのとき、とっても嬉しかった。昔のあなたは、とっても優しく、いつも手伝ってくれたけど、なぜか急に意地悪をし始めて、どうしたのだろうと思っていた。まあ、私には友達がいらない、特に、多分女子からは全員から嫌われている、男子からも遠ざかれる、でも最初に話しかけてくれたのはあなただった。それで、どうして変わってしまったのかを知りたいの。でも、中々いうときがなくて、そうこうしているうちにこんなことになってしまった。でも、友達になったら、話してくれるかなと思って・・・あの・・・友達になってくれる？」

レツハ「・・・っ・・・」

レツハはうつむいたまま何もいわなかった。そして、ボウに蹴られているダンバルをモンスターボールに戻すと、石を持ち、そしていきなりナツカに投げた。それを見事キャッチしたボウ。そして、レツハは、ボウを見るとこう言った。

レツハ「俺なんかが友達になったって、多分いじめるとおもう。きつと、いや絶対嫌な気持ちになる。だから・・・お前の願いは聞けない・・・」

ナツカ「でも約束したじゃん！」

レツハ「だからっ！」

ナツカ「だからじゃない！男でしょ！！！？男なら・・・約束を守るって・・・守るってボウちゃんが言ってたもん！約束を守らない男なんて、男じゃない！」

レツハ「な・・・」

ナツカ「別に、なりたくなければそれでいいの。ただ・・・ちょっと知りたいの。何で人が変わっちゃったのか・・・」

レツハ「それは・・・その・・・えっと・・・」

レツハは指いじりを始めて顔を赤らめた。

レツハ「その・・・か・・・かわいいから・・・」

ナツカ「え？」

レツハ「だ、だから！かわいいからだよ！お前が！！」

ナツカ「あ・・・」

ナツカはその言葉を耳にすると、体が固まった。

レツハ「かわいいと・・・なんか・・・いじめたくなるんだよ・・・。かわいいと・・・。お、お前はずるいんだ！まだ8歳なのにそんなスタイルで、性格も良くて！お前なんかまだいいほうさ・・・。お前は知らないだろうけど、俺のほうがずっと辛いさ！これを見ろ！！」

レツハはそういうと、上半身裸になり、背中を見せた。すると、ナツカたちは言葉を失った。その背中には、タバコを押し付けられた後が約100以上あり、また刃物か何かで「レツハ死ね」や「レツハ殺す」など、レツハに対して脅し言葉や、あるところには、銃を撃たれたところもあった。そして、一番ひどかったのは、腰あたりのところの肉が剥ぎ取られていたことだった。

ナツカたちは、レツハの背中を見るといろいろな事が頭に思い浮かんだ。すると、レツハがなきながらいった。

レツハ「腰辺りにある傷は俺が2歳の時にやられたやつだ！俺は生まれてすぐに親から虐待をされ、周りの人たちからも嫌われ、時には暴力を振られ、一番悪いときなんか、裸で気温が-30℃のところに半時間閉じ込められたこともあった！でも俺は、生きることには誇りを持ち、ずっと耐えてきた！でも・・・でもお前は違った・・・。いつも俺に笑顔を見せてくれた。そんな顔を見て嬉しかった。今思うと、とっても悪いことだが、きっとお前にも同じ苦痛を味わってもらいたかったんだと思う。それと、ずっとお前と二人きりでいたかったんだと思う。多分、お前が女子とか男子からいじめられるのは俺がいるせいだ。俺がお前のそばにいるから近寄らないんだ。俺さえいなければ、お前は有名人さ。何せ、最初からお前は親に恵まれ、お前は覚えてないかもしれないけど、たくさんの子供たちから囲まれていた。そんなお前に俺は・・・ほれたんだ。これが・・・

真実さ。本当はお前をいじめるつもりなんてなかったんだ……。
本当は……。ごめん……。ごめんん……。！！！！」

レツハそういうと、地面に倒れこみ泣き叫んだ。すると、ナツカがゆっくりとレツハに近づきながらこう言った。

ナツカ「そうだったんだ……。ありがとう、レツハ。ごめんね、悪いことを思い出させちゃって……。私……。あなたのことを全然知らなくて……。本当にごめんなさい！あの……。私は別に嫌じゃないよ？むしろ、嬉しいよ、あなたと話せて……。友達になる。レツハ」

ナツカはそういいながらレツハに手を差し伸べた。すると、チコがつるのムチでレツハの手を掴むと、ナツカの手に触れさせた。すると、ナツカはその手をギュッと握り締めて、レツハを起こした。そして、レツハの涙を拭くと、ジャケットなどを渡した。

レツハ「ありがとう……。俺は……。やっぱり友達にはならない。お前だからこそ友達にはならない。それにもうお前には友達がいるじゃないか。2人も。それで十分さ。俺の夢は好きな女子が出来ることなんだ。昔の出来事が原因で、人も信じなかった俺に、好きな子が出来た。これはもう夢がかなったんだ。それで、その次の夢はその好きな女の子に幸せになってもらうこと。だから、俺はお前の友達にはならないし、もうこれからはお前には近づかない。一人でいや、ダンバルと一緒に、この世界を旅するよ。

ありがとう。ナツカ」

ナツカ「あ……。初めて……。ナツカって呼んでくれた……。ありがとう」

レツハ「べ、別に・・・／＼・・・それじゃあ・・・」

レツハはそういうと、静かに森の奥へと進んでいった。そして、ナツカは願った。いつかまた、レツハとあえるように、と。

「→ホグワシティ ↓ポケモンリーグ」という看板をナツカは見つけた。それを見たボウは目を輝かせていた。

ボウ「うわー！ポケモンリーグ！ねえねえ！ここいこうよ！早速ポケモンリーグに挑戦できるよ！」

ナツカ「ちょっと待って！よく見てよ注意書きを。『ポケモンリーグにはジムバッジを計16個集めてから挑むべし。16個集めていないもの、入るべからず』って書いてあるよ。今私、バッジ1個も持っていないよ？」

ボウ「バッジ？なにそれおいしいの？」

ボウのバカさには本当にあきれる。ちなみに簡単に説明しておこう。ジムバッジとはジムに行ったらもらえるバッジだ。

ナツカ「ってちょっと待てーっ！それだと全然意味ないじゃん！もう！私が説明する！ジムバッジというのは、各地のシティやタウンにあるポケモンジムで、そこでポケモントレーナーは自分の実力を試すの。それで、そのポケモンジムには必ず一人はジムリーダーという人がいて、その人はそのジムで一番強い人なの。それで、その

ジムリーダーに勝てばジムバッジがもらえるの」

おゝさすがナツカさん。詳しいゝ!!

ナツカ「いや、普通だけど・・・(汗)」

ボウ「しょんなく・・・ショック・・・」

ボウはすっかりご機嫌斜めだ。はい、ということでも・・・ご機嫌斜めのピ・チュ・ウ!!!!

ナツカ「誰がピチューだよ!」

すると、そこへ、胸の背中に「R」の文字がついた服を着ている一人の女性と一人の男性、そして、Rはついていないが、その代わりに・・・ばけねこポケモンのニャースというポケモンがやってきた。

ナツカの願いと・・・（後書き）

はーい！さあ、今回は前半はシリアスで皆さん大嫌いのレツハの過去話！それと後半（といっても短い）は少しコミカルでした！

次回は、最後に出てきた3人（正式には2人と1匹）の正体が！

「R」の三人衆！（前書き）

はい！早速アニポケ（アニメポケモン）とコラボですよ。

今回はデュランダルさんには気づかれたあの三人衆の登場です！

で、短いです。

「R」の三人衆！

Rの女性「あゝ今日もジャリボーイの”ピカチュウ”をゲットできなかった・・・何とかしなさいよ”コジロー”！」

Rの男性「そんな、俺に言われてもー！！（泣）いたいいたい、叩くなよ”ムサシ”！」

ニヤース「でも大丈夫ニヤ！ニヤアが付いてれば、必ずジャリボーイのピカチュウはゲットになるニヤー！！」

胸と背中に「R」の付いた服を着た女性「ムサシ」と、胸と背中に「R」の付いた男性「コジロー」、ばけねこポケモンの「ニヤース」は、そんなことを言いながらナツカたちのところへとやってきた。

このニヤース、とっても珍しいポケモンのようだ。なぜなら、人間の言葉をしゃべることが可能なのだから！

ニヤース「うるさいニヤ！作者は黙ってるニヤー！！！！喰らえ！みだれひっかきニヤー！！ニヤニヤニヤニヤニヤー！！」

うわー！いたいいたい、やめてー！！↑顔が傷だらけ。

ナツカ「あら？あなた達は？もしかして、ポケモントレーナーですか！？なら、ポケモンバトルをしましょうよ！！！」

ムサシ・コジロー・ニヤース「えー！？（ニヤー！？）」

ナツカは、この三人衆（正確にいい言えば、二人衆と一匹）をポ

ケモントレーナーだと思い込み、バトルを仕掛けた。

だが、ムサシとコジローとニャースは、そんなことを無視して、ナツカのポケモン（チコだけ）を見て目を輝かせていた。

ボウ「つて俺は!？」

お前は視覚に入っていないからダーイジョーブ!

ボウ「大丈夫ちゃうわあああああああああああああああ
あ!!!!!!!!!!!」

チコ「チコ？」

チコは、三人衆（正確にいい言えば、二人衆と一匹）にずっと見つめられて、やや引っ込み気味だった。

だが、ナツカは頭に一個怒りマークをつけていた。

ナツカ「あの〜早くやりましょうよ! 2対2で!」

ムサシ「わ〜かわいい!!!! ねえねえ、コジロー! あのチコリータをゲットしない!？」

コジロー「そうだな〜!! かわいいし〜きつとサカキ様も大喜びするだろう」

ニャース「それだけじゃニヤニヤ! まず、ニャアたちがこのチコリータをゲットする。そして、アジトに持って帰ってサカキ様にあげる。そして、次の日に、サカキ様はパツと目を覚ます。すると、目の前にこのチコリータがいて、満面な笑顔で笑う。すると、サカ

キ様は朝から気分がよくなる。そして、ニャアたちにこう言うニャ。
『お前達にはとても感謝しているニャ。こんなにかわいいチコリー
タをくれたのだからニャ。そういうお前達には褒美をやらねばなら
んニャ』とニャ!」

ムサシ「さっすがニャース! そうなれば・・・」

ムサシ・コジロー・ニャース「いい感じ〜!」※アニポケでこう言
うときにいつも言うセリフを忘れてしまったので、これだけです。
誰か教えてくださーい!!!!!!」

ムサシとコジローとニャースはそんなことを言いながら、飛び跳
ねていた。一方、ナツカというと・・・。頭に三十個怒りマークが
付いていた。

ナツカ「いい加減に・・・しろやあああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ!!!!!!」

ナツカはそういいながらそこら辺にあった大きな岩（全長50セ
ンチ）を蹴っ飛ばした。

それを見たチコは怯えてボウに抱きつき、ボウはチコに抱き疲れ
たとたん、チコを抱きしめながら鼻血を出して気絶した（笑）

「R」の三人衆！（後書き）

次回、皆様も知っているあの人物が登場！！！！

お楽しみに！！！！

大大人気の少年と大大人気のポケモン（前書き）

よっしやあ！行くJ！^{ジエー}！

ナツカ「・・・フフ・・・」↑周りに黒いオーラがまわり付く

怖いよ・・・ナツカ・・・

（書き方を一部変えました。）

大大人気の少年と大大人気のポケモン

ナツカ「もういいわ・・・こうなったら・・・。行きなさい！チコ！つるのムチ！！」

チコ「チッコ！」

チコはつるのムチでRの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）に攻撃を仕掛けた。Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）は、攻撃を喰らうとかなり吹っ飛んでしまった。

ムサシ「何で」

コジロー「こんなことに」

ニャース「なっっちゃうのかニャ・・・」

Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）「やな感じ！！！！！！」

Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）はそう言いながら星となった（笑）

ナツカは、Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）が吹っ飛んでいくのを見ると、すぐにチコを褒めた。チコはまるで「褒めて褒めて！」というような感じで、ナツカに飛びつく。ナツカはそれを見事に抱きとめ、笑顔で優しくチコのはっぱをなでてあげた。

ナツカ「よくやったわチコ！ さすがチコね！ さて、このヨーギラスはどうしましょう」

すると、一瞬にして、ヨーギラスに寒気が走り、ヨーギラスを身震いさせた。と、そのとき、チコがナツカから離れると、ボウの横に立ち、優しくボウの顔（鼻）をなめた。するといきなりボウが立ち上がってチコを力強く抱きしめた。

ボウは、そういいながらチコを抱きしめたまままた倒れて気絶した。顔は先ほどにらみつけられる前と同じだ。

ナツカ「さて、いきましょーか」

39

ナツカ「そういえばさ……ボウちゃんって、なんで人間の言葉がしゃべれるの？」

ボウ「え？えーと……それは……その……」

困ったなとボウは思った。自分は実は人間で、なぜかポケモンだったの！といえば疑われ、最悪の場合、嫌われてしまうかもしれないとボウは思っていた（いや、まず第一の声は「え！？」）だと思
うが……）。

ボウ「えーっと……な、何で……かなあ……お、俺も……
わかんないや！」

ボウは騙そうとした。だがバレた。

ナツカ「本当は人間だったんでしょ！だってよくあるもんそういうこと。私、前におばあちゃんの家で呼んだことがあるんだけど、「ポケモンはたまに人間の言葉がしゃべることがある。それは、人間がポケモンになったか、またはテレパシーの力を持っているかのどちらかである。だが、テレパシーはある特定のポケモンしか持っていない。普段身近に見るポケモンでしゃべるというポケモンは、ほとんどが人間からポケモンになったものだ。」って書いてあったもん。それで、ボウちゃんはよく身近に見るから……」

ボウ「いやヨーギラスそう簡単には見つからないよ！？」

ナツカ「それがいるんだな。この辺の近く・・・といってもホグワシテイの先を行ったところなんだけど、そこにはなぜかしらないけど、よくヨーギラスが集まるのよ。だから、実はいうと、ホグワシテイもヨーギラスを持っている人は多いのよね」

ボウ「へえ・・・痛っ!・・・まったく誰だよ・・・」

??? P「ピカチュウウウウ・・・」

??? S「ピカチュウー!大丈夫かー!!?」

??? M「サトシさーん!ここら辺は走ると危ないん・・・」

??? S「うわっ!・・・いつつ・・・」

ナツカとボウ、チコ（チコはナツカの頭に寝転んで居眠りをしてる）の前に、黄色いネズミのようなポケモンと、赤と黒で出来た帽子、青と黒でできたジャンパー、青と黒で出来たズボンをはいた美少年と、黄色の髪の毛で、右前の髪の毛が三つ綱で、フードの付いた上から下までつながっている茶色っぽい色のローブを着て、銀色に輝く十字架のネックレスをつけた美少女がやってきて、ボウは黄色いネズミのようなポケモンとぶつかったのだ。

そして、美少年はナツカのまん前でズルッ!とガキンッ!とランランランとなってしまうた（ズルッ!は滑った音で、ガキンッ!はどっかを打った音、ランランランは頭でひよこが踊っている（要するに気絶状態）のこと）。そこに、??? Mが駆け寄る

??? M「大丈夫ですか?サトシさん。ピカチュウ」

サトシ（？）「あ、ああ・・・大丈夫。ありがとう、ミネノ。大丈夫か？ピカチュウ」

ピカチュウ（？）「ピカピカ！！」

ミネノ（？）「ん？ああ！も、申し訳ございません！どうぞ！」

ミネノという美少女は、ナツカたちがそこで待っているのに気が付き、端によった。よったのだが。サトシという美少年はよらなかった。それをピカチュウというポケモンが一生懸命サトシに伝える。だが、一刻にサトシはナツカたちの存在に気が付かない。それにちよつと腹がたったのか、ボウがこう言った。

ボウ「おうおうおう！どきやがれてんだ！アストンさまのおとりだぞ！！」

だがサトシたちには「ヨーヨーヨー」といっているようにしか聞こえていない。すると、サトシがこつち（といってもヨーギラスのボウにだけだが・・・）気が付いて、目を輝かせながらこう言った。

サトシ「コイツ・・・ヨーギラスじゃん！なんか懐かしいな～ヨーギラス・・・今、元気にしてるかな～・・・」

サトシは、空を見ながらそんなことを言っていた。すると・・・

サトシ「よし！お前とバトルだ！」

とまあおんきなことをいっていた。すると、ようやくそこへナツカが割り込んできた。

ナツカ「あのー、そのヨーギラス、私のポケモンなんですけど。まあ、バトルというのであれば、受けてたちますよ！」

サトシ「え！？そうなの！！？それじゃあ、バトルだ！！君に決めた！リザードン！」

リザードン「フンッ・・・！」

サトシ「リザードン・・・（汗）」

ーナツカから見てのサトシのリザードンー

このリザードン・・・サトシって言う人にあまりなついてないのかなー。

終

すると、いきなりリザードンがボウにかえんほうしゃを仕掛けてきた。

ボウ、戦闘不能

サトシ「リザードン・・・それは不意打ちだよ（汗）」

そんなリザードンを見てサトシはあきれ、ミネノは苦笑い、ピカチュウはため息をしていて、ナツカは目を輝かせて、感動していた。

大大人気の少年と大大人気のポケモン（後書き）

さうて、今回もまさかのアニメとコラボ！ですが、サトシと動向をしていたあの美少女ミネノは俺のオリジナルキャラです。ちよつと作ってみました。

さて次回！

チコVSリザードン・・・なのですが・・・（汗）

なんと、またあいつら襲来！

Rの三人衆・改（前書き）

はい、あいつら登場！&かなり短い！

Rの三人衆・改

サトシ「さて、次はどんなポケモンだ？」

サトシは、あきれた時の汗を流しながらも、次のナツカのポケモンを期待した。ナツカは・・・

ナツカ「うわー！あのリザードン、めっちゃ強い！しつ前はあんまりなっていないけど、すばやさといい、攻撃力といい……。これはやりがいがあるわ！よし！行きなさい！チコ！！」

チコ「チコオ・・・チコオ・・・チコ！？チ、チコ！！」

チコは、ぐっすり眠っていたが、ナツカのあるオーラを感じ取ったのか、目にも留まらぬ速さでフィールドへ出た。

ナツカ「チコ、たいあたり！」

チコ「チッコ！」

リザードン「グアアアア！」

チコ「チコオオオオオ・・・」

チコは、リザードンの殺気を感じ取り、ピタッととまってしまった。それを見たリザードンは一瞬にニヤリと笑みを浮かばせ、いきなりほのおのうずを放った。

炎の渦は、どんどんチコの周りを囲んでいく。更に、リザードン

は勢いよく、翼を羽ばたかせ、炎を強めた。炎はどんどん強さを増していく。そして、勢いよく翼を羽ばたかせた反動で空を飛び、空中から炎に向かって急降下していった。そして、炎のまん前に来ると、その周りをぐるぐると回るではないか。更に更に強さが増していった。と、そのときであった。

ウィーンガシャン！ウィーンガシャン！

何かがこちらへやってくる音がした。音からして、これは何かの機械のようだ。そして、その正体が現れた。その正体は、大きな大きな竜のようなポケモンの形をしたマシンだった。

ミネノ「これは・・・ボーマンダ？」

ミネノは、そのマシンを見て、ボーマンダといった。このマシンは、四本足で立っていて、背中には赤い大きな羽根、二本の角が生えていた。すると、いきなり、そのマシンの翼から大きな手のようなものが現れ、ほのおのうずを消して、チコを掴み、更にはリザードンをもつかみあげた。すると、口の中にその二匹を入れてしまった。

リザードンは必死にそのマシンにかえんほうしゃなどの攻撃をし、チコも必死に抵抗するが、全く歯が立たない。

サトシ「リザードン！つく、こうなったら、ピカチュウ！10まんボルト！！」

ピカチュウ「ピカッ！ピカッ！ピカッ！ピカッ！ピカッ！！！！！！」

ピカチュウは、体全身から強力な電撃、10まんボルトを出すが、

それでもきかなかった。すると、そのマシンからある声が聞こえた。

??? 「ナッッハッハッ!!」

??? A 「全く貴様らの用心の無さにはあきれるねっ!!」

??? B 「こいつらはニャアたちがもらってくニャ! おみゃーら(チコとりザードン)、早くお別れの言葉を言うニャ! 別にいわなくてもいいがニャ」

??? C 「さって! 早くサカキ様に見せてあげないと!」

サトシ 「何なんだお前達は!」

サトシがそういうと、その三人は待ってましたっ!! とでもいうかのように、すぐにボーマンダの頭から現れた。そして、現れながら、こんなことをいっていた。

??? A 「お前達は何なんだ! という声を聞き」

??? B 「答えてあげるが世の情け」

??? A 「天から舞い降りし、輝くキューピット!」

??? B 「地から舞い降りし、情熱のキューピット!」

??? A 「ムサシ!」

??? B 「コジロー!」

ナツカ「嫌とは言わせないわ！早くリザードンで応戦しなさい！チ
コ！はっぱカッター！」

ニヤース「バカめ！このマシンはそんなものきかないニヤ！これでも喰らうニヤ！かえんほうしゃ！」

ニヤースがそういいながらある赤いスイッチをおすと、ボーマンダのマシンの口からかえんほうしゃが出てきた。だが、そのかえんほうしゃもすぐに消えてしまった。

Rの三人衆・改（後書き）

次回！なんとあのポケモンが！

まさかのポケモン(前書き)

まさかですよ!?

まさかのポケモン

ミネノ「あ、危ない！」

ミネノがそういうともに、ナツカとサトシ、ミネノは目を瞑った。

だが、ある声が聞こえると共に、マシンが壊れる音がした。

「エンテイ！ かえんほうしや！」

エンテイ（？）「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「フシギバナ、エナジボール！ボスゴドラ、もろはのずつき
 ！！！！！！」

フシギバナ（？） 「バーナー！」

「ボスゴオオオオオオオオ！！！！！！」

突然、何者かがボーマンダのマシンに攻撃をしたのであった。

当然、マシンは壊れ、破壊される音が響いた。それと同時に、ロケット団の3人の叫び声も聞こえた。

ムサシ「うわうわうわうわー!!!!!!・・・つててて・・・もう!
こうなったらポケモン勝負!行きなさい!コロモリ!」

コジロー「よし、新しく捕まえたポケモン、いけ！ゴビット！」※

アニメでは違うと思います

コロモリ(?) 「コロコロ!!」

ゴビット(?) 「ゴビ!!」

ムサシとコジローが面白いながらモンスターボールを投げると、一匹は顔が目がハートになっていて、一つしかなく、その周りにはモコモコした水色の毛のようなものがあり、その背中には黒い翼があるポケモン、コロモリとロボットのような形で、お腹の辺りには渦巻きの模様が書かれているポケモン、ゴビットというポケモンが出てきた。

ムサシ 「コロモリ! フシギバナにエアカッター!」

コジロー 「ゴビット! ボスゴドラにメガトンパンチ!」

ニャース 「エンテイにみだれひっかきニャ! ニャニャニャニャニャ
!!!!」

??? 「エンテイ、かえんほうしゃ! フシギバナもう一度エナジーボール! その後にパワーウィップ! ボスゴドラ、もろはのずつきの後にアイアンテール! あなたたちは早く安全なところへ!」

声の主はポケモンに指示をしていく中、ナツカたちに命令した。
すると、ミネノがこう言った。

ミネノ 「分かりました。ありがとうございますタユキさん。さあ、いきましょ」

サトシ「誰だ？」

タユキ（？）「俺はタユキ、ポケモントレーナーさ」

ミネノ「この人は・・・このオリジン地方のポケモンリーグのチャンピオンなのよ」

サトシ「え！？ そうなの！？」

タユキ「まあ、とにかくトレーナーさ。よし！そろそろかたをつけようか・・・。レントラー！かみなり！ウォーグルあばれる！サクラビス、ハイドロポンプ！！！」

レントラー「レントラーッ！！ レーーーーントラーーーーーー
ーーーーッ！！！！！！！！！！」

ウォーグル「ウォー！ウォーグル！！！」

サクラビス「サクー！サアクウウウウウ！！」

コロモリ「コロ」

ゴビット「ゴビ」

ムサシ「これって・・・」

コジロー「もしかして・・・」

ニャース「いつもの・・・」

[illegible]

ミネノ「何でサトシさんまで驚くの……」

ミネノは、そう思いながら苦笑いをしていた。タユキもミネノの気持ちがかかったらしく、一緒に苦笑いをしていた。だが、彼女らはまだ、これから悲劇が起こるということを知らないでいたのだった。

まさかのポケモン（後書き）

次回、悲劇到来！

スラッシュ団 (前書き)

はい、悲劇が起きます・・・多分。

でも、その悲劇はミネノだけに・・・(汗)

ミネノ「・・・」↑気絶状態

何故こうなのかは本編にて(汗)

スラッシュ団

ナツカ「あ！チコ！！」

ナツカはチコのことを思い出し、辺りを見た。サトシもリザードンのことを思い出し、辺りを見た。だが、二匹はどこにもいなかった。すると、エンテイがいきなりなき始めた。

エンテイ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオ!!!!!!!!!!!!」

タユキ「どうした?・・・そうか分かった。ナツカちゃん、サトシ君、ミネノちゃん、ちよつと突いてきてくれ。3人もこのエンティに乗るといい」

ミネノ 「どこに行くんですか？」

ミネノが代表として、タユキに尋ねた。

タユキ「チコリータたちの居場所が分かったんだ。エンテイが探し出してくれた。さあ行こう！」

タユキにいわれて、三人はエンティの背中に乗った。ボウも目が覚めたらしく、エンティの背中が気持ちくてもぬかいとのんきなことをいっていたが、チコがいないということに気がつきまた氣絶してしまった。

タユキ「そのヨーギラスは面白いね。君の最初のポケモンかい？」

タユキはナツカに笑顔で質問した。

ナツカ「いえ、最初のポケモンはチコリータのチコです。まあ、とはいっても、あのチコは三代目なのですが……。昔、友達……と私は思っている人とそのポケモンにいじめられて、一代目のチコはその人とポケモンにいじめられて亡くなってしまって、二代目もあの子を産んだ後に一代目と同じようになってしまったんです。それで、三代目のチコと旅をし始めて、一番最初に捕まえたのがこのヨーギラスのボウちゃんなんです」

タユキ「そうだったのか……。すまない。悪い思い出を思い出させてしまって……」

ナツカ「いえ、大丈夫です。気にしないでください」

サトシ「そういえば、ナツカは何歳なんだ？」

サトシが今度はナツカに質問した。

ナツカ「私は8歳です」

ミネノ「え!?!?!?!?……」

ミネノはナツカの体と八歳という言葉を合わせていると、案の定ネガティブ状態になり、「負けた」だの「ありえない」だのとぶつぶつぶやいていた。

サトシ「へえ、8歳なんだ。可愛いじゃん!」

サトシは笑顔でナツカにいった。ナツカは嬉しそうだったが、ミ

ネノからしては大ダメージだった。そして「私にはそんなこと言ってくれなかったのに・・・」とまたぶつぶつ言い出した。

タユキ「確かに、ちょっとロリコン的な感じになっちゃうけど、かわいいと思うよ。スタイルもいいし」

今度はタユキがミネノに大ダメージを与えた。逆にナツカは笑顔でご機嫌でもあった。ミネノはタユキの言葉をきくと「私はスタイルが良くないんだ・・・」とつぶやきながらエンテイの頭に倒れこんだ。（ミネノが一番先頭、その次にナツカで、サトシ、タユキという順番にエンテイの上に乗っている）

ミネノが倒れると、エンテイは少し後ろを見ながら「フウ・・・」とため息をついていた。

タユキ「ここらしい・・・」

エンテイがとまり、タユキが指をさしながらいった場所には、「S」の文字がかかれている半円状の建物だった。今はもう夜で暗いため、Sの文字が書かれている半円状の建物は、窓から光が出ている。幸いなことに、建物の外には誰もいなかった。ちなみに、その建物がある場所は、奥深い森の中で、森の中はその建物の明かりとつきだけが照らしている。

四人はこっそりと窓から中をのぞいた。そこで見たものは、大きなカプセルの中に、チコとサトシのリザードンや、そのほかにた

くさんのポケモンが入っていて、その前には研究者や博士と見られる人、緑をベースとした服とズボンを着ていて、緑の帽子をかぶっている男性、緑をベースとしたへそが見える服とスカートをはいいて頭には小さい緑のハットをかぶっている女性がいた。そして、真ん中には、黄土色のロングヘアで黒い服の上にモコモコしているコートをはおり、長いブーツを履いている女性がいた。

タユキ「ここは、スラッシュ団の秘密基地のひとつでムツミが仕切っているのか・・・」

タユキは一人でそんなことを言っていた。先ほどからミネノのそばで伏せているエンテイもタユキを見た。

タユキ「君たちはここにいてくれ。すぐにあのポケモンたちは折り返すから。それと、警察も呼んで。エンテイ！行くぞ！」

タユキが小声でナツカたちにやることを言って、エンテイを呼ぶと、ナツカたちは小声で反論した。

ナツカ「嫌です！チコは私のポケモンで、きっと私を待っています！」

サトシ「リザードンも同じです！」

エンテイ「ウオン・・・」

エンテイもナツカたちの言うとおりで、とても言うかのようにゆっくりとうなづきながらほえた。

タユキ「君たち・・・分かった。じゃあ、まずは警察を・・・」

タユキが携帯を取り出し、警察に伝えようとしたそのときだった。

??? 「そうはさせないぜ！」

??? 「私達が来たからには、あなた達はムツミさまに通報しなくてはね」

ナツカ 「誰!？」

突如現れた謎の者達に吃驚したのか、ナツカが代表として驚きながら尋ねた。

??? 「その言葉を待っていた！」

??? 「礼儀として答えよう！」

??? 「風のごとく素早く登場・・・」

??? 「雷のごとく素早く倒す・・・」

??? 「華麗なる踊り子”モエノ”」

??? 「燃え上がる情熱”ヨウジロウ”」

モエノ (？) 「我らスラッシュ団の目の前に！」

ヨウジロウ (？) 「立ちほだかるもの何も無し！」

タユキ 「皆、行こう」

サトシ「はい」

ナツカ「分かりました」

突如現れたモエノと名乗る女とヨウジロウと名乗る男の自己紹介的なものを無視し、タユキたちは建物の中に入っていく、エンテイもぶつぶつ言いながら気絶しているミネノを背中に乗せるとタユキたちの後についていった。

そして、その周りにはさむくい風が吹いたという。

モエノ「あ、れ？」

ヨウジロウ「どう、して？」

モエノ・ヨウジロウ「いっっちゃうのー！！！！！！！！？」

2人が抱き合いながらそういうと、中からミネノを乗せているエンテイが現れ、2人にかえんほうしゃを放った。2人は泣き叫びながら星のかなたまで吹っ飛んでしまった。

スラッシュ団 (後書き)

はい・・・ミネノの悲劇でした(笑)

次回は、シリアスですね。多分。

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち〜前編〜（前書き）

ちよつと前編とかに分けてみました。

さあ、今回はタユキが大活躍！

タユキ「行くぞ！」

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち〜前編〜

ナツカたちは、今物陰に隠れていた。エンティは大きいためタユキのモンスターボールの中だ。そして、奥のほうから女性の声が聞こえた。

女性「フッフッフ・・・この調子で私の計画が進んでいったら、我らスラッシュ団の夢の一つがかなう！皆のもの！もっと働け！」

下っ端たち「ハッ！」

女性がそういうと、下っ端たちは敬礼をしながら大きな声で返事をした。

タユキ「あいつが、この建物のリーダーで、名前をムツミという。一見、若そうに見えるが、あいつは実は言うところ60すぎのおばちゃんなんだ。でも、油断はするな。おばちゃんだが、ポケモンバトルの実力は確かだ」

ナツカ・サトシ「はい！」

タユキが小声でそういうと、ナツカとサトシも小声で返事をした。一方、ミネノは目は覚めたが、まだ頭がくらくらするらしく、寝転んでいる。

ボウ「ハ・・・ハ・・・ハックション（ヨーーーーーギス）！！！！！！！！！！」

三人がそんなことを話していた時、ボウが大きなくしゃみをして

しまった。すると、ムツミたちがこちらに気づいたらしく、タユキたちの周りをたくさんのスラッシュ団が囲んだ。すると、一人が誰かに連絡をした。すると、下からムツミたちも駆けつけ、もう逃げ場がない状態になってしまった。

タユキ「クソ・・・こうなったら・・・サトシ君ナツカちゃん、君たちは手分けをして下の連中を倒すのとらわれているポケモンたちを助けるかの分担をしてくれ。ミネノちゃんは俺に任せて！さあ早く！」

タユキはそういいながらエンテイとフシギバナとボスゴドラを出した。それと同時に、タユキたちの周りにいる全スラッシュ団下っ端たちもいっせいにポケモンを出した。

ナツカたちは、すぐにタユキに言われたとおりにして、話し合った結果サトシが下のやつらを食い止めて、ナツカがポケモンたちを助けるという結果になった。

サトシ「行け！ピカチュウ！ジュカイン！」

ピカチュウ「ピッカ！」

ジュカイン「ジュカ・・・」

サトシ「ナツカ！ポケモンたちを任せたぞー！！！！」

ナツカ「はい！任せてください！！！！」

ナツカは、いつの間にか敬語でサトシと話した。そして、ナツカはポケモンたちのそばへとかけていった。

一方、こちらタユキの状況。

タユキ「フシギバナ、パワーウィップ！ボスゴドラもろはのずつき！エンテイはにほんばれの後にあたり一面にソーラービーム！！！」

フシギバナ「バアアアアアアアアアアアアア！！！」

ボスゴドラ「ボオオスウウウウウ！！！」

エンテイ「グオオオオオオオオオオ！！！」

下っ端たち「なに！？クソッ！！」

下っ端たちはやはりオリジン地方ポケモンチャンピオンが相手で、結構苦戦をしていた。だが、タユキも数え切れないほどの大量の下っ端たちと戦っているため、結構苦戦をしていた。

タユキ「クソ・・・倒しても倒してもどんどんポケモンが出てくる・・・。ちよっとこれは時間の問題かもしれん・・・。ツク・・・エンテイ！攻撃をやめてミネノちゃんを死守しろ！いけ！レントラー！」

レントラー「レエエエエン！！！」

タユキはエンテイにミネノを守るよう指示し、タユキはレントラーを出した。

タユキ「レントラー！かみなり！」

レントラー「レエエエエントラアアアアアアアアアア！！！！！！」

タユキ「つく・・・ん！？あれは・・・ならいちかばちか・・・！」

タユキは、汗を拭きながらあるものを見つけると、何かの策が思
い浮かび、勝利の微笑を見せた。

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち〜前編〜（後書き）

次回は後編！

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち〜後編〜（前書き）

かなり短いお！

それと、後書きにお知らせが！

ア!!!!!!!!!!!!!!」

タユキがそういうと、エンティは今までのかえんほうしゃとは桁違いの大きさと威力を誇るかえんほうしゃを周りに放った。周りにいるスラッシュ団の下っ端たちは全員窓から外へと吹っ飛んでいき、星のかなたまで飛んでいった。

すると、タユキの後ろに、一人の少年がゆっくりと歩いてきた。タユキは、ゆっくりと後ろを見ると、目がまるで殺されるときのような怯えている目になった。

一方、この建物外で男女2人組の者達がいた。

??? 「モエノ・・・これからどうするよ・・・」

モエノ(?) 「決まってるじゃないヨウジロウ! 拠点へ戻るのよ! ムツミ様の拠点に侵入者が入ったって!」

ヨウジロウ(?) 「そ、そうだな! よし、それじゃあ・・・」

??? 「どこへ行くんだ?」

男女2人組のモエノとヨウジロウの前に、一匹のはがねタイプと見られるポケモンと一人の少年が今にも2人とバトルをしたいというかのような目をしながらにらみつけていた。

タユキVSスラッシュ団の下っ端たち〜後編〜（後書き）

今回はサトシの場面です。

それとお知らせです！

色々☆にもかきましたが、ここでこのポケモン小説に出たい！という肩を募集します！

一人につき、2人まで認めます！詳しくは色々☆にて。

サトシVSスラッシュ団の下っ端たち（前書き）

今回も短いです。

サトシVSスラッシュ団の下っ端たち

タユキが赤いスイッチをおす前の話に戻ろう。今度はサトシの状況だ。

サトシは今、およそ10人ほどのスラッシュ団の下っ端たちと戦っている。サトシは、ピカチュウとジュカイン、ミジュマルで応戦している。

サトシ「ピカチュウは10万ボルト！ジュカインはリーフブレード！ミジュマルはシエルブレードだ！」

サトシはそれぞれの的確な指示をする。だが、スラッシュ団も中々良い指示をしてきた。

下っ端A「ポチエナ、ほのおのキバ！」

下っ端B「ストライク、シザークロス！」

下っ端C「ゴースト、シャドーボール！」

サトシ「クッソ……結構強いな……」

サトシは、まだ子供のためか、結構苦戦をしていた。だが、そんな彼にピカチュウ、ジュカイン、ミジュマルは「あきらめるな！」とでも言うかのように声を合わせて鳴いた。その想いが伝わったのか、サトシも目つきが変わり、いつものバトルを楽しむような目になった。

サトシ「こうなったら・・・ジュカインとミジュマルはリーフブレードとシェルブレードを合体させて突撃！その後ろからピカチュウは10万ボルトで援護だ！」

サトシがそう指示すると、3匹は一緒にうなずき、言われたとおりにやった。

サトシ「とどめのピカチュウ、ボルテッカーで吹っ飛ばせ！！！！！！」

ピカチュウ「ピカ！ピーカピカピカピカピカピカアアア
アアアア……」

下っ端たち「な、なに!?! うわあああああ! く、来るなお前達! ! ! ! ! ! !」

ピカチュウは、サトシに言われると、ポケモンだけではなく、スラッシュ団の下っ端たちも一緒に飛ばしてしまった。それを見ると、サトシたちは抱き合い笑顔を交わした。だが、そんなサトシの戦いぶりを見て、ゆっくりと拍手をしながら一人の青年がやってきた。

「これはこれはさすがだね。君。何歳？これはすごいや。是非、スラッシュ団に入ってもらいたいものだ。どうだね？スラッシュ団に入ると、とってもいいことが起きるよ？」

サトシ「俺にそんな嘘は通用しない！ ポケモンたちを返せ！」

「それは無理な相談だ。だが、我らスラッシュ団の仲間になれば、ポケモンを一匹あげよう。どうだい？」

サトシ「知らない！人のポケモンを奪って、何をする気だ！そんなやつら、ロケット団と一緒にじゃないか！」

???「ロケット団？それはどういった組織だね？まあ、いい。断るといふのであれば、ここから立ち去ってもらおう・・・。あ、申し遅れた。私はスラッシュ団研究部A幹部の”トオル”だ。よろしく。君は名はなんだい？」

サトシ「お前にいう名前はない！素直にポケモンを返さないのであれば、力づくで変えさせてもらうのみ！ピカチュウ！頼んだぞ！」

ピカチュウ「ピカ！」

こうして、サトシとトオルのポケモンバトルが始まった。

サトシVSスラッシュ団の下っ端たち（後書き）

次回はナツカの場面ですが・・・あの人物が登場！

ナツカVSムツミ〜助っ人登場〜（前書き）

あゝコラボを約束していた方々、まだ登場ではありません。

まあ、そんなこんなで、今回はナツカの場面です。

さて、あのキャラが助っ人に！

ナツカVSムツミく助っ人登場く

ナツカは今、ポケモンが入っている大きなカプセルの前にいた。

ナツカ「へえくこんな風になってるのかく。これは簡単にハッキングできちゃうわね」

カタカタカタカタ

ナツカはまるでプロのような手さばきでどんどんコンピュータを解除していった。すると、右からカプセルが開き、ポケモンは目を瞑ったまま倒れたが、すぐに目を覚ますと、ナツカはハッキングをしながらポケモンに「早くトレーナーの所に戻りなさい」といった。

ハッキングをしていくと、チコもカプセルから出て、サトシのリザードンも出ると、チコはボウちゃんに抱きつき・・・と思いきやリザードンに抱きつき、リザードンはチコを抱き上げながらナツカの元へとやってきた。そして、思い切ってチコを抱こうとしていたボウは、リザードンを見ると、瞬間的にネガティブになってしまった。

ナツカ「ボウちゃん・・・。そうネガティブにならないでよく。あ、ありがとうねリザードン。・・・よし！これでハッキングは終了！」

ナツカがそういういながら立ち上がると、どこからか、女性の声がした。

???「あらあら・・・。あなた、よくもまあポケモンちゃんたちを逃がしてくれたねく。覚悟は出来てるでしょうね！！！！！？」

ナツカ「あなたは・・・ムツミ!!!!!!」

ナツカが素晴らしいながら声のするほうを見ると、タユキの言うオバサン、ムツミとそのムツミの肩の上には、カラスのようなポケモン、ヤミカラスがいた。

ムツミ「さうて、ヤミカラス！ブニャット！やっておしまい!!!」

ムツミは素晴らしいながら方の上にいるヤミカラスとモンスターボールからとらねこポケモンのブニャットを出した。ナツカはそれを見ると、チコを戦場の場に出した。もう一匹、ボウも出そうと思つたが、ボウは今ネガティブモードに突入しているので、仕方が無く、リザードンをお願いをした。リザードンは一つうなづ頷くと、戦闘モードに切り替えた。

ナツカ「行くわよ！チコ、はっばカッター！」

ナツカがそういうとチコははっばカッター、リザードンはヤミカラスにかえんほうしゃを放った。対するムツミチームはヤミカラスはリザードンにシャドーボール、ブニャットはチコに10万ボルトを放ってきた。力は互角、結構いい勝負だ。チコのはっばカッターも、10万ボルトで粉碎された。

ムツミ「ヤミカラスはこごえるかぜ！ブニャットはリザードンにみずはどう！」

ナツカ「チコ、リザードンの背中に乗って、はっばカッター！リザードン、お願い！空中に飛んで！」

ナツカがリザードンにそういうと、リザードンはチコと息がぴったりのような感じで、チコがリザードンの背中に乗ると瞬間的に空中を飛び、技をかわした。更に、上からののはっぱカッター攻撃で、ムツミチームの二体はダメージを負った。

ナツカ「その調子よ！チコ、ブニャットをつるのムチで持ち上げてヤミカラスに落として！」

チコ「チイイイイイイイイコオオオオオオオオオ！！！！」

チコは頑張ったが、ブニャットの重みがすごいのか、あまり持ち上げられなかった。だがそんなとき、どこからか、声が聞こえてきて、ある一匹のポケモンが技を繰り出し、ブニャットが宙に浮くと、そのままヤミカラスに落ちた。ナツカは声のするほうを見た。そこには、ナツカと同じような身長少年がいた。

??? 「ナツカ、助けに来たよ」

ナツカ「レッハ！」

そう、その少年は、元ナツカをいじめていた少年、レッハだった。だが今のレッハの顔、目つき、行動はこれまでのレッハとは違っていった。まるで、悪の道から正の道へと戻ってきたような、そんな姿だった。そして、隣にはダンバル・・・いや、ダンバルの進化系ポケモン、てつメポケモンのメタングがいた。そして、先ほどの技はそのメタングのねんりきだろう。

レッハ「ここからは、俺も参戦するよ！メタング、ヤミカラスにメタルクロー！カポエラー、ブニャットにねこだました！その後にはブ

ニヤットにまわしげり！」

ナツカ「よし！チコ、つるのムチでブニヤットの動きを止めて！リザードンはヤミカラスをやっつけて！」

レツハとナツカの息の良さは、まるで双子の兄弟のようだった。チコのつるのムチで動きを封じ、そして、ねこだましで相手をひるませて、最後にまわしげりで止めを刺した。だが、カポエラーのまわしげりは普通のまわしげりとは何かが違った。それをナツカは不思議に思い、思い切ってレツハに尋ねた。

ナツカ「なんか、カポエラーのまわしげりどこか違うけど・・・どうして？」

レツハ「え？ああそれはね、カポエラーのとくせいさ。カポエラーのとくせいには二つあって、一つはいかく。相手の攻撃力をダウンさせるんだ。そしてもう一つ。これがこのカポエラーのとくせい、その名もテクニシャンさ。このとくせいはある一定の威力を持つ技（ゲームでは60以下）なら1，5倍にしてくれるとてもバトルには便利なとくせいなんだ」

ナツカ「へえ。すごい！あ、今はバトルに集中しなきゃ！」

ナツカは新しいことを知り、とても喜んだが、今はバトル中。ふざけている場合ではないのだ。それも、これは普通のバトルではなく、何かをかけたバトルなのだから、なおさらだ。

ムツミ「くう・・・よくも私を怒らせてくれたわね・・・もういいわ。これで終りよ！！！！出てきなさい！私の友よ！！！！！」

ムツミは、そういいながら腰に手を当て、新たなるポケモンを出した。それは、大きなトンボのようなポケモンだった。

ナツカVSムツミ〜助っ人登場〜（後書き）

次回、ナツカたちに悲劇が訪れる！

ムツミの切り札！(前書き)

今回、ナツカたちに悲劇が！？

ムツミの切り札!

ナツカ「こ、このポケモンは・・・」

ナツカはとても驚いていた。見たこともないポケモンが出てきたからである。

ムツミ「フッフッフ・・・驚いたでしょう?これはメガヤンマ!オニトンポケモンよ。でもこのメガヤンマは普通のメガヤンマとはわけが違う。そう!まず一つ目は見た目!このメガヤンマは色違いなのよ!そして、二つ目!それは・・・速さよ!!!!!!!!!!」

ムツミがそういうと同時に、メガヤンマは目にも留まらぬ速さで動きを見せ、まるで瞬間移動をしたかのように、チコの前に現れ、技を仕掛けた。

ムツミ「素早さを生かした先手必勝の技、さいみんじゅつ!これであなたのポケモンも終りよ・・・。メガヤンマ!その忌々しいチコリータにむしのさざめき!!!!」

メガヤンマ「ヤン!ヤアアアアアアアンマアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ナツカ「チコオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ナツカは叫んだ。だが、チコは目をぐるぐるしていた。そう、戦闘不能だ。

ナツカ「つく・・・ボウちゃん、お願い。戦って!」

ナツカは最後の望みである、ボウに話しかけた。ボウは、それを聞くと、立ち直り、戦場の場に立った。

ボウ「よし！行くぜ！！！」

ボウは気合いを入れて、戦闘態勢にはいる。だが・・・。

ムツミ「何をやっても同じよ！ヤミカラス、戻りなさい。これであなとは終り・・・。頼んだわ！ベロベルト！きあいだま！！！！！」

ムツミが素晴らしいがらなめまわしポケモンのベロベルトを出すと、ベロベルトは出た瞬間に大きなエネルギー球をボウに向かって放った。その球はボウに命中してしまい、周りには煙が立った。そして、煙が消えると、そこには目を回して倒れているボウの姿があった。

ナツカ「ボウ・・・ちゃん・・・」

ナツカは、素晴らしいがらボウを抱き上げると、涙を流しながら謝っていた。

ナツカ「ご・・・め・・・ん・・・ご・・・め、ん・・・っ・・・うう・・・うわーん！！！！！！！！！」

ナツカは謝っていると、色々と頭に入ってきたのか、泣き出してしまった。

ムツミ「フッフッフ・・・ちびっちゃん女子ごときが、大人に勝てると思っていたのかい？甘ったれるんじゃないよ！！！！・・・フフ

フ・・・さて、今度はそのガキでもしとめるとするか・・・。メガヤンマ、みきり！ベロベルトはメタングにだいもんじ！」

レツハ「なに！？つく、メタング、かわせ！カポエラーはあなをほる！」

レツハがそういうと、二匹は言われたとおりに行った。リザードンは、空中からメガヤンマにかえんほうしゃを放った。だが、メガヤンマはみきりでその攻撃を避けてしまった。すると、メガヤンマは瞬間的に、リザードンの前に現れると、さいみんじゅつを放った。リザードンはこれにあたってしまい、バタリ、と眠りながら倒れてしまった。

ムツミ「フッフッフ・・・これで後はガキ、お前だけね・・・ベロベルトはまもる！メガヤンマはみきり！」

ムツミがそう指示すると、二匹は言われたとおりに行った。すると、ベロベルトの後ろにカポエラーが現れ、キックをやるうとしていた。だが、これを待っていたかのように、ベロベルトはまもるを行い、攻撃を防ぎ、そして、カポエラーに抱きつく、いきなり大爆発をした。そう、これぞ、ベロベルトの切り札、だいばくはつであつた。カポエラーはこれを喰らうと目を回して戦闘不能状態になった。だが、だいばくはつをしたベロベルトも目を回していた。

ムツミ「さて・・・出てきなさいヤミカラス！ここからは空中戦よ！ヤミカラスはメタングにあくのはどう！メガヤンマはむしのさざめき」

メガヤンマ「ヤアアアアアンマアアアアアアアアアアアアアア」

レツハ「つく・・・何故だ・・・？何故かメガヤンマの動きが早くなっている・・・どうして・・・」

レツハ、思ったことを口にした。すると、それが聞こえたのか、自慢げに睦みは答えた。

ムツミ「これもアンタのカポエラーと同じ、二つのとくせいを持つポケモンの一匹でもあり、その中のかそくというものがとくせいだからさ」

レツハ「か、かそく！？つく・・・だからか・・・。かそくはバトルをしていく中でどんどん素早さが上がる・・・。だから、こんなにも早くなっていたんだ・・・。つく、してやられたな・・・。だが俺のメタングはそう簡単には・・・な！？め、メタング！？」

ムツミ「あら～？聞こえていなかったかしら？私がメガヤンマを出す前に、ヤミカラスに”ほろびのうた”を歌わせていたのよ。でもヤミカラスは歌った後に戻したから効果なし。お前のメタングと、今まで眠っていたあのリザードンは聞いていたから、戦闘不能状態なの。残念ね。さて、もう終りかしら？」

ムツミの策略にしてやられた、とレツハは思った。こんな短時間でここまでやられるとは思ってもいなかったのだ。

まず強いのはあのメガヤンマだ。とくせいを活かし、最初から早かった素早さを更にあげて、攻撃力も中々のもの。これは強敵だ。更に、あのヤミカラスも只者ではない。攻撃力が高いほか、影で相手のポケモンをフォローしている。そして、先ほどのベロベルトもかなりの威力を誇っていた。さすが、スラッシュ団の拠点のひとつでもあるここを仕切っていることはある、とレツハは思った。

レツハ「つく・・・でも・・・でも俺は・・・まだ負けちゃあいない！まだ、一匹残ってる！！！」

レツハそういいながら一匹のポケモンを出した。それは、クリスタルのようなもので出来ているかのようなポケモン、バーチャルポケモンのポリゴンだった。

ムツミの切り札！(後書き)

今回は、メガヤンマ&ヤミカラスVSポリゴンですよ！

ポリゴンの力やいかに！？

それと、今回はちょびっとだけタユキとサトシの場面も出す予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2632y/>

ポケットモンスター Dream story

2011年11月27日18時05分発行